

新型コロナウイルス感染拡大予防対策下のカリキュラム・マネジメント - A幼稚園5歳児クラスの実践を中心に -

松島 英恵¹⁾*

1) 新見公立大学健康科学部健康保育学科非常勤講師

(2020年11月18日受理)

2020年3月より新型コロナウイルス感染症拡大予防のために臨時休園となった幼稚園は多く、臨時休園中の子どもや家庭への支援、保育再開後の保育の工夫などが幼稚園の課題となった。A幼稚園は「育てたい資質・能力」を育成するカリキュラム・マネジメントを実践している。A幼稚園の5歳児クラスのコロナ禍における1学期の保育の実践から、「育てたい資質・能力」を核としたカリキュラム・マネジメントの概念に基づいた保育は、コロナ禍においても保育方針が一貫して安定するとともに、新たな保育ツールの柔軟な導入や、保育実践の省察を通しての保育の再構成など、質の高い保育をめざすことにつながる事が明らかとなった。

(キーワード) コロナ禍の保育、育てたい資質・能力、カリキュラム・マネジメント

1. はじめに

新型コロナウイルス感染症拡大予防のため、2020年2月27日に全国一斉臨時休校要請が発表され、3月から臨時休園の措置が始まり、4月の緊急事態宣言発令も経て結果として5月末まで臨時休園が延長された幼稚園は多い¹⁾。家庭で子どもを養育することが難しい場合などについては、保育所や認定こども園、また幼稚園での預かり保育は実施されていたが、多くの子どもたちは家庭で過ごすこととなった。誰にも見通しがもてない混乱の中、臨時休園中の子どもの育ちをどのように支えていくのか、保育再開後に子どもの健康を守りながらどのように保育をつくっていくのかということが、幼稚園で働く保育者の大きな課題となった。

幼稚園には、小学校以降の教育機関のような学習保障の義務はないが、幼児教育の実践の質向上に関する検討会の「幼児教育の質の向上について(中間報告)」にも述べられているように「幼児教育は生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なもの」²⁾であり、小学校以降の学びの基礎を培う幼児教育の重要性が謳われている。さらに「幼児教育は、幼稚園、保育所、認定こども園といった幼児教育施設だけでなく、家庭、地域等の幼児が関わる遊びや生活のあらゆる場面において行われるもの」²⁾であるとも示され、「新型コロナウイルス感染症が拡大する中、幼稚園等においては、自宅で過ごすことが多くなる幼児及びその保護者との連携を密に…し、…家庭における幼児の心身の健全な発達に向けた必要な支援を行うこと」³⁾を求めている。臨時休園中の取組は、子どもたちのために、そして家庭の支

援のためにも、なされなければならないものであった。また文部科学省より出された「学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル～『学校の新しい生活様式』～」⁴⁾では、幼稚園においては幼児特有の事情を考慮して、感染症対策や、遊びや環境の工夫をすると共に、保護者同士、教師と保護者間が密接に接しないような配慮を呼び掛けている。幼稚園現場では「今の状況で何ができるのか」「どのような配慮や工夫をしたらいいのか」と各保育者が手探りで情報を集め、臨時休園中の支援や保育再開後の環境や保育内容について模索がなされた。文部科学省初等中等教育局幼児教育課からも「新型コロナウイルス感染症への対応のための幼稚園等の取組事例集」⁵⁾(令和2年5月13日時点)が出され、全国各幼稚園やこども園での取り組み事例が示されている。コロナ禍での保育の情報が少ない中、各園の工夫を参考にすることができるのは貴重である。しかし取組事例であるため、具体的な活動内容の記載が主で、その活動が子どもたちのどのような資質・能力を育成することにつながるのかという記載は少ない。

平成30年4月から実践が始まっている新幼稚園教育要領⁶⁾では「幼稚園教育において育みたい資質・能力」などが明確化され、幼児教育において、育成したい資質・能力をふまえた上でのカリキュラム・マネジメントの在り方を求められている。「例年行っているから、今年もこの活動を行う」「子どもが楽しめると思うので、この活動しよう」と活動内容が先に決められているカリキュラム・マネジメントではなく、子どもの現在の心身の状況と、育ちの見通しを踏まえ「このような資質・能力の育成につながるだろう」と考えて活動内容を工夫するカリキュラム・マ

*連絡先: 松島英恵 新見公立大学健康科学部健康保育学科 718-8585 新見市西方1263-2

マネジメントの在り方である。いつ収束するか見通しのない状況において、すぐ実践可能な活動を応急的に取り入れるのではなく、子どもの育ちを見通し、どのような資質・能力の育成につながるのかを考慮した活動や支援を取り入れる必要があると考えられる。臨時休園中の子どもや家庭への支援、再開後の保育において、カリキュラム・マネジメントの考え方をもとに支援や保育の工夫をすることは、一貫した方針の中で安定した保育をつくることにつながるだろう。

筆者が在籍しているA幼稚園では2020年2月に「教育課程『育ちの履歴』から編成する資質・能力を育成するカリキュラム」を発行し、「多様な子ども一人ひとりをもとに（評価）、『育てたい資質・能力』を勘案するところから次の保育を計画し、実践していく『子どもスタートの教育』」⁷⁾を実践している。A幼稚園の新型コロナウイルス感染症拡大予防下の実践から、幼稚園におけるカリキュラム・マネジメントの効用について考察したい。

2. A幼稚園について

2-1. A幼稚園の臨時休園・保育再開までの流れ

本園は奈良市の閑静な住宅地にある国立大学附属幼稚園であり、3歳児から5歳児までの子どもが在籍している。各学年2クラスずつで編成され、2020年7月の現在全園児数は135人である。奈良県のみならず、大阪府や京都府から電車やバスの公共交通機関を利用して通園する子どももおり、大阪や京都に通勤している保護者も多い。また新型コロナウイルス感染症拡大予防のための対策は奈良市の情報を得ながらも、大学と連携して独自に行っている。A幼稚園の休園・保育再開までの流れについては表1の通りである。

当初3月のみの予定であった臨時休園が、少しずつ延期され、明確な保育再開時期の見通しがもてない状況であった。4月始業と考えてカリキュラムを考えていたところ、直前で臨時休園が延長になり、再び保育内容を考え直すとい

表1. A幼稚園の臨時休園と保育再開までの流れ

3月2日～16日	休園（※3月13日にクラスごとの修了式実施）（預かり保育有）
3月17日～4月7日	春季休業（以降預かり保育なし）
3月26日	4月末まで登園時間短縮を通知
4月6日	4月9日～5月6日まで臨時休園を通知（始業式と入園式は実施予定）
4月7日	4月に自由登園日をクラス別に設ける 大阪、兵庫に緊急事態宣言が発令されたことを受け、当該地域からの通学・通勤自粛要請
4月8日	始業式実施
4月10日	入園式の延期、自由登園日の中止を通知
4月16日	全国に緊急事態宣言が発令される
4月30日	5月末まで臨時休園の延期を通知（3歳児は6月5日に入園式後、分散登園） 6月の保育再開後の分散・時差・短縮保育を通知
5月20日	「新型コロナウイルスへの対応を踏まえた保育の基本方針について」を配布
6月1日	保育再開（分散・時差・短縮）（1学期は午前保育のみ） ※4・5歳児は最初の2週間は5、6人ずつ週に一回登園、次の2週間は11、2人ずつ隔日登園、6月29日より全員一斉登園 ※3歳児は6月5日に入園式、翌週から3週間5、6人ずつ週に一回登園、次の2週間は11、2人ずつ隔日登園、7月13日より全員一斉登園
6月5日	3歳児入園式をクラスごとに実施
7月22日	終業式
7月23日	夏季休業
～8月30日	

うことになり、さらにまた延期されて再考するということの繰り返しに翻弄された。5月末までの臨時休園が明確になってから、臨時休園中及び保育再開後の家庭支援や保育について、本格的に取り組まれることとなった。

またA幼稚園において、3歳児はほとんどの子どもが集団生活の経験がない新入園児である。4歳児は、クラス替えがあり、担任も替わった。5歳児はクラス替えがなく、担任は3歳児や4歳児の時に担任であったことがある。学年ごとに子どもたちの状況が異なるため、保育に対しての考え方や工夫内容も異なる。本稿においては、筆者が所属している5歳児の実践に注目し、考察することとする。

2-2. A幼稚園のカリキュラム・マネジメント

A幼稚園では「2018年度より、2017年度に改訂された『幼稚園教育要領』（文部科学省）の内容も受け」、「3年間の育ちを見通した『育ちの履歴』を作成」し、「2019年度はその実践と共に見直しを行い、新しい教育課程及び指導計画」を作成している⁸⁾。新しい教育課程及び指導計画は「『誰かが編成してくれるカリキュラム』を実施するのではなく、目の前の子ども達と関わりながら日々の保育を創造していく保育者自身」が主体となってマネジメントすることにより教育活動の充実と質の向上を求めるものである⁹⁾。保育実践においては、「カリキュラム及び指導計画を立てる際に核となるのが『教育目標』であり、『育てたい資質・能力』である」としている¹⁰⁾。「子どもの多様な能力や個性的な才能を教師がみとり、『育てたい資質・能力』のビジョンをもつことがとても重要」であり、多様な価値観が存在する社会に生きる子ども達自身の多様性を大切に、「その子らしさ」を尊重する保育をめざしている¹¹⁾。

「育てたい資質・能力」については、2007年より、活動や学級の記録の振り返りや、学級や個人の変化から「何が育ってきたか」という視点で振り返り、さらに教師のねらいや意図の解説を付記した「活動の履歴」の記録を積み重ねたもの、また2006年より附属小学校との共同研究の中で資質・能力レベルで幼稚園と小学校のつながりを模索してきた中でみえてきたものが基盤となっている¹²⁾。教育課程においては、「子どもの育ちの質的な変化を捉え、『期』を設定」しており、これまでの研究で積み重ねてきた観点と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」などを参考にしながら「育てたい資質・能力」の要素を言語化し、検討・修正・改善を重ねてきている¹³⁾。そしてその取組の中で、次の効果が実感された。「幼児教育実践における根本的な問いを常にもち、子どもに向き合い、保護者に説明し、PDCAサイクルを意識するようになった」「現状の『子どもの姿』と『育てたい資質・能力』から活動を精選することで、教師のねらいがより明確になった」「自分が自覚していなかった保育におけるねらいを自覚できるようになり、言語化できるようになった」「幼小一貫した『育てたい資質・能

力]をもつことにより、教師が子どもの育ちを見通せることで…子どもの育ちを長期的に支えることができるようになった」「育ちについて保護者と共有することで保護者も安心して子どもの育ちについて見守れるようになった」¹⁰⁾。カリキュラム・マネジメントの実践は、保育者の専門性の高まりや保育の質の向上につながり、また小学校との連携、保護者への支援にもつながるものであるといえる。

2-3. A幼稚園の取組の概要

A幼稚園の教育課程を核にどのような資質・能力を育成することにつながるのかを考慮した上で保育再開後の保育を見直し、1学期の保育計画がたてられた。家庭への支援としては、家庭で楽しめる範囲で、家庭で取り組んでほしい内容を精選した。家庭への支援の方法としては、紙媒体に掲載した遊び方や教材を家庭に郵送する方法と、ネット活用の方法が用いられ、どのような資質・能力の育成につながると考えての内容であるのか、保護者にも説明がなされた。先の見通しと共に、「何ができるようになったか」ではなく、「どんな力が育ってきたか」を捉えることの大切さについて保護者にも動画や手紙で伝え、コロナ禍においても焦ることなく子どもたちを見守っていけるようにした。

教材の郵送は4月に1回、5月に2回行われ、内容については各学年の実状に合わせて検討された。6月の保育再開後も分散登園が続き、保育時間が短かったため、教材の配布は続けられた。

ネット活用については、大学と連携し、大学規定のルールに基づいてソフトの使用や著作権侵害がなされないようにした。保護者以外の視聴ができないように制限をかけると共に、保護者にはパスワードを祖父母にも伝えないことを求めた。はじめに保護者に「オンライン活用ガイド」を配信し、園の方針としての活用の意図とともに、利用について「ストレスにならない範囲で」「体を動かす機会として」「就寝前の利用は避けるように」などの諸注意を伝えた。教材としてはオンデマンドで動画を配信し、動画配信予定のプログラムを紙媒体で送付すると共に、動画配信される当日に保護者へメール配信で通知した。5月～7月まで週1回程度、各学年向けや全学年向け、保護者向けの内容などを組み合わせて配信した。動画は既成のものではなく、オリジナルのものを編集した。A幼稚園では、クラス担任に1人1台のタブレットが支給されており、以前からタブレットで写真や動画を撮影し、活動の振り返りにデータを使用することはあったが、子どもが直接機器に触れることは少なく、積極的に動画教材などを保育に取り入れてはいなかった。この度、Society.5.0時代を生きていく子どもたちにとって、保育ツールの1つとしてICT機器の活用は避けられないことであると考え、どのような活用が適しているの

かを探りながらの実践となった。また、家庭とつながるツールとして、オンライン個人懇談会も実施された。

6月からの保育再開にあたっては、文部科学省や奈良市の指針、大学の方針を踏まえ、手洗い・うがいの徹底や消毒、フィジカル・ディスタンスをとるための工夫をすること、感染リスクを減らすため異学年交流は避けることとなった。マスクは自由選択活動では外し、学級全体活動では着用すること、飛沫飛散予防の為に歌は小さな声で歌うなどのルールも決められた。送迎の保護者は各家庭1人とし、登園時は敷地内に入らず、降園時のみ敷地内に入ることができる。保護者と保育者が直接関わる機会は制限されたため、連絡事項については掲示板やメール、電話、紙媒体の手紙や動画も活用した。

保育については、3か月にわたる長期臨時休園であったことを踏まえ、心身の開放と保育者や友達との関係づくりに重点をおいた。A幼稚園では1年を4～5期のまとまりで捉え、期ごとに育成したい資質・能力について考えているが、今年度はゆるやかに捉え、活動内容や行事も精選して落ち着いて過ごせるように配慮することとなった。

フィジカル・ディスタンスについては、子どもたちにとって身体接触が人との関わりをつくる上で必要不可欠なものであるとみなし、活動の前後の手洗いと消毒の徹底を条件に、積極的に身体接触を伴う活動を取り入れないが、遊びや生活の中で子ども同士が手をつなぐ、顔を寄せ合って相談するなどの姿については制限しないこととした。

3. A幼稚園 5歳児の1学期の取組について

3-1. 取組内容

A幼稚園の教育課程において、5歳児は1年間を5つの期に分けて捉えている¹²⁾。1学期はⅠ期とⅡ期にあたる。臨時休園中は家庭で実施可能な範囲で育成につながるような資質・能力を念頭に、教材・遊びの内容を精選した。幼稚園という環境や集団生活だからこそ育成できる資質・能力に関することは、主に6月からの保育再開後に取り組みという見直しをもって計画された。保育再開後は命と健康を守ることを一番にしながら、経験できなかったことを補いつつ、新たに「いつもと違う状況にも対応したり、楽しみを見つけたりする力」を育成していくことも重視した。また、前年度末より、子どもたちが年長に進級すること、新入園児の世話をすることを楽しみにする姿が見られており、進級した実感や喜びを味わう経験をどのように保障するのか、園全体の取組として模索された。さらにA幼稚園の5歳児の行事である「キャンプ(宿泊保育)」については、感染症予防のための課題をクリアしにくいことから宿泊は中止し、「よるまでようちえん」という15時から20時30分まで幼稚園で過ごすという新たな行事が企画された。その行事の内容を5歳児が自分たちで考えられるよう

に工夫することで、友達と協同して活動する体験を保障することとした。主な取組内容については表2、表3、表4の通りであるが、表記されていない生活や遊びの中でも「育てたい資質・能力」は意識されて保育しており、表記されている内容のみで育てようとしているものではないことを明記しておく。6月保育再開後の取組についてはコロナ禍において特に意識して取り組まれたことを記載している。

表2. A幼稚園の取組（1期4月2週～5月3週）

育てたい資質・能力	臨時休園中の取組内容	6月保育再開後の取組内容
・新しい環境に適応する	・5歳児用に新しく購入された玩具の遊び方の紹介を動画で配信した。	・6月再開後に、例年の4月と同様に場所の紹介などとして適応できるようにした。フィジカル・ディスタンスの確保や共有物を減らすことなどから、椅子に記名し、個人の居場所が明確にわかるようにした。
・新入の友達に関わることで、年長になった自分を意識する一メタ認知	・直接関わりはもてないが、年長になった自分を意識できるように、連続した自分の姿を描いてもらい、登園後誕生表として保育室に飾った。	・直接新入園児と関われないため、3歳児が何を喜ぶのか意見を出し合いながら入園歓迎を表す壁面飾りを作成し、制作風景とメッセージを動画にして入園式に3歳児に視聴してもらった。また3歳児が壁面飾りを見て喜ぶ様子を撮影して動画を配信した。
・いろいろな場所でいろいろな人と関わり、楽しさを見つける		・時間的・物理的制限はあったが、保育時間中に友達と一緒に遊ぶ時間や、情報交換する時間を確保した。
・自分なりのめあてをもつ	・手伝いや縄跳びなど内容は問わず、自分で決めたことを毎日できるように提案した ・こいのぼり作りで5歳児の個人教材である図形絵具（前年度購入済）を使用し、自分でこいのぼりの模様をデザインできるようにした。 ・折り紙と折り方を配布し、自分で取り組めるようにした。 ・新聞紙を使ってボールや棒などの道具を作り、「めあてカード」（挑戦したらシールを貼る）を使ってのいろいろな体の動かし方に挑戦できるようにした。体の動きを経験した後で、紙粘土で自分の身体を表現できるようにし、登園後保育室に飾った。	・活動を繰り返すことで育つものと捉え、個々が自分なりのめあてをもてるように援助した。 ・郵送したものと同じ「めあてカード」を自由選択活動の中でも使用できるようにし、友達と刺激し合って挑戦できるようにした。 ・「よるまでようちえん」での活動において、友達と一緒に遊びを進める中で、自分なりのめあてが意識されるようにした。
・身近な自然への好奇心	・家庭の周りにおける自然物に関心をもてるように、押し花セットや、ペットボトルでの花瓶づくり、スプラウトの発芽実験、テントウムシやダンゴムシの遊び方の資料を送付した。	・送付した遊び内容を幼稚園でも取り組めるようにした。 ・子どもがみつけた植物を飾ったり、変化を観察できるようにしたり、生き物を飼育したりできるようにした。
・友達の遊びを自分の遊びの選択肢としてつなぐ	・友達ではなく、家族がしていることに興味をもてるようにすることを提案した。	・時間的・物理的制限はあったが、保育時間中に友達と一緒に遊ぶ時間や、情報交換する時間を確保した。分散登園中は、グループごとの遊びの様子の写真や友達への伝言を聞き取ったものを掲示し、他のグループの友達をしていることにも関心をもてるようにした。
・日本の伝統文化の豊かさを味わう	・家庭や地域で育ててきたものとして本来の意味を考え、家族で共有する機会にできるように提案し、こいのぼり作りの教材セットを郵送した。	

・家庭で自粛生活をする中で、生活リズムが乱れがちになること、運動不足になりがちであること、ストレスをためやすくなることも予想され、それらの点についての支援も考えられた。また、保護者への連絡ツールとしてインターネットの活用もされた。

3-2. 成果と課題

実践を通して次のような子どもの姿や保育者の思い、成果や課題が明らかになったが、1学期の取組が子ども達の育ちにどのような影響を与えたか、それをどのように捉え、保育を再構成していくかなどは、今後の保育実践による。ここでは7月末の状況での結果を述べることにする。

・カリキュラム・マネジメントの考え方をもとに家庭支

表3. A幼稚園の取組（11期5月4週～7月3週）

育てたい資質・能力	臨時休園中の取組内容	6月保育再開後の取組内容
・身の回りの始末の自動化		・コロナ対策のため、昨年度までと変更している方法が多く、定着まで時間がかかるものとして丁寧に援助することとした。
・目の前にない活動の枠の中に、自分なりの楽しさを見つける		・「よるまでようちえん」の行事の中で、お友達さんごっこができるように企画し、どんな遊びにしたいか、どんな物や役割が必要か、どのように遊ぶかなど友達と話し合って遊びを進められるようにした。
・次の活動に見通しをもち、心づもりをする	・家庭において一日の予定を一緒にたてることを提案した。	・「よるまでようちえん」でのお友達さんごっこ以外の過ごし方についても、子どもたちが考えを出し合えるようにした。
・一緒に活動を進めていくための態度・プロセスの経験	・家族の一員としての役割をもって過ごせるように提案した。	・園の畑で自らが収穫した玉ねぎを、家庭で料理してもらい、料理しているところや、食べているところなど絵で表現できるように教材を持ち帰らせた。後日友達に知らせ、保育室に掲示した。
・自分の経験の要素を抽出して、言語化する	・家族の中で対話の大切さについて伝えた。	・自分の夢を絵や保護者の聞き取りで表現し、各月に誕生児が友達の前で発表できるようにした。 ・学級での集まりでは、自分の経験や考えを知らせる時間を確保した。
・様々な環境において安定して活動する		・分散登園中は6人ずつの登園にし、個別に丁寧に関わるようにした。 ・気持ちの安定につながるように、自由選択活動の時間を確保した。
・文字の果たす役割に気付く・遊びに文字や図形を用いる		・「じゃんけんさんかくじんとり」「ことばのじんとり」(本園で開発された言葉や数をを用いて遊ぶゲーム。専用の用紙がある)の用紙と遊び方を郵送した。
・興味の対象を継続して観察する視点をもつ	・各学級専用の畑に植える野菜についてのクイズや、苗を植える様子を動画で配信した。	・野菜の世話や収穫を当番活動としてできるようにしたり、発見したことを伝えたり、図鑑などで調べたりできるようにした。
・日本の伝統文化の豊かさを味わう	・七夕の物語を OHP で映像化し、動画で配信した。	・七夕飾り作りを、園でも家庭でもできるようにした。

表4. A幼稚園の取組（その他）

・生活リズムや健康について	・「はげんだより」で健康習慣クイズ迷路や手洗い法を知らせた。
・運動不足を補う	・動画で体操やアートヨガ、ダンスを保育者が実践しているようすを動画で配信し、家庭でも動画を見ながら体を動かす機会ももてるようにした。
・ストレス解消	・卒園生のシンガーソングライターによるコンサート動画を配信した。 ・季節の歌を、手作りペープサートも使って保育者の演奏、合唱する様子を動画で配信した。
・保護者への連絡として	・園長挨拶、職員紹介、保育方針について、動画や手紙で知らせた。 ・希望に応じてオンラインや電話での個人懇談、メールでの教育相談に応じた。保育再開後は、希望により対面の個人懇談も行った。 ・保育再開後は、その週の子どもたちの様子や、「よるまでようちえん」の行事の様子について動画を配信したり、暑中見舞いとして個々に手紙を送付したりした。

援や保育内容について工夫することで、インターネットの活用など新たなツールの導入に際しても「育てたい資質・能力」を核として、これまでの保育方針からぶれることなく実践できた。ただし、クラスの子どもたちに直接会わない中で、子どもたちの状況を本当に把握できているのだろうかという不安が保育者の中にあっただ。年度末の子どもの姿や、電話連絡やオンライン個人懇談などで個別に把握した情報をもとに、子どもの現状を推測することの難しさがある。これまでの保育の中で、保育者は子どもたちと応答的にやり取りしながら「子どもスタート」の保育をつくってきたからこその不安でもあろう。保育の中の応答性を代替できるような、双方向のやりとりをする工夫ができてよかったのかもしれない。「これでよかったのか」と常に自己を省察することもまた、カリキュラム・マネジメントの一環の中で必要なことである。この省察の繰り返し、2学期以降の保育の再構成につながっていくと考えられる。

・臨時休園中のオンライン個人懇談などで、「子どもが楽しんで動画を視聴し、一緒に踊っている」「前の担任の先

生が動画に出ていて喜んで」「作ったものを先生に早く見せたいと言っている」など、動画や教材を家庭で利用している様子うかがえた。ストレスや運動不足解消にもつながった面もあると思われる。これまで、動画などの教材を保育に取り入れたことがなかったため、撮影への抵抗感や編集の負担感など職員間にも取り組みに対する思いに温度差はあったという。新型コロナウイルス感染拡大が収束した後に積極的な利用をするかどうかは検討しなければならないが、新たなツールを取り入れる機会となったのは確かである。

・保護者に保育中の子どもの姿や育ちについて伝える手段としての動画配信について、物理的技術的負担は大きかったようだが、動画作成にあたって保育の中で何を大切にしているのかがより明確になったと共に、保護者にわかりやすく伝えるための工夫がしやすいツールであることが明らかになった。これまで、口頭やクラスだより、写真掲示などで伝えてきたが、動画も新しい手段となり保護者には好評であったようだ。

・郵送した教材の取組は強制ではなく、家庭によって取り組み方に差はあり、子ども本人ではなく保護者や兄弟が全て作ってしまうケースや、取り組むこと自体が難しいケースもあった。それも家庭の状況を把握する機会とし、保育再開後に個別に経験をフォローできるように配慮された。

・「子どもの日」「七夕」などの伝統行事や、身近な自然物との関わりについては、ステイホームで外出しにくい中、家庭でじっくり取り組むよい機会となり、家庭教育の充実につながったと考えられる。

・臨時休園中の取組は、保護者の不安をやわらげ、家庭での過ごし方の提案をすることによって支援することにつながった。育てたい資質・能力について保護者に丁寧に伝えることは、子どもの育ちの見通しを伝えることになり、今の状態に焦らなくてもいいのだというメッセージを伝えることになった。一方で、幼稚園でできないことの補完を家庭に押し付けてしまっていないか、負担を増やしてしまうことにつながっていないかという疑問をもつ保育者もいた。強制ではなく提案であり、ストレスを感じない範囲での利用を呼び掛けたものの、保護者によっては「家がんばらなくて」と思い詰めてしまうこともあったかもしれない。保育の方針をもって実践することは保育者として当然のことであるが、方針の伝え方については、保護者の負担にならないように配慮することも課題となるだろう。

・入園式に関しては、学年間交流ができないため、代替の経験が工夫された。間接的ではあるが、3歳児は入園を歓迎してくれる5歳児の存在を知り、5歳児は3歳児への思いを伝えること、3歳児の反応を知ることを通して、進級した喜びや自覚を感じさせる経験になったと考えられる。実際の体験に及ばなくとも、最初から「できない」とあきらめて

しまうのではなく、育成したい資質・能力を念頭におくことで代替の方法を模索できることが明らかになった。

・「自分なりのめあてをもつ」という資質・能力については、比較的個々の取組を通して育てることができないかと考えられたが、保護者や子どもたちの話や様子から、1人で取り組んでも楽しめない、継続しにくいという姿が浮かび上がったという。「自分なりのめあて」は集団生活の中で友達と刺激し合うことで明確になり、互いを意識しながら挑戦したり、教え合う中で意欲が増したりするということがわかった。幼児教育が集団の中で行われる意味を改めて考える機会となった。

・A幼稚園では、友達と関わる中で育つ資質・能力の育成につなげられるように、5歳児では1学期から「協同活動」を保育に取り入れている。「協同活動」は、遠足など友達と一緒に経験したことを土台として「動物園ごっこ」など自分たちで企画し、共通のめあてをもって必要なものをつくり、役割分担をし、3、4歳児を招待して楽しんでもらえるようにするプロジェクトである。今年度は「よるまでようちえん」の行事の中で、5歳児のみでやりたい遊びを企画し、クラス間で互いの遊びに招待し合えるように工夫した。活動の中で友達と考えを出し合い、共通のめあてや見通しをもって、友達と一緒に活動を進める体験はできたと思われる。しかし、同年齢の友達との関わりだけでは、「困ったこと」が起こりにくい。年下の友達が「どうやって遊んだらいいのかな」「何をしたらいいのかわからない」などと途方にくれる姿を見ることで、自分たちの遊びを振り返り、改善し、相手に合わせようと工夫するようになる。また、年下の友達が「すごーい!」「楽しい!!」と素直に表現してくれることは、年上の子どもの意欲の高まりや充実感につながる。コロナ禍での保育を通して、改めて異年齢交流の必要性が浮き彫りとなった。2学期は、感染拡大の状況をみながら、異年齢交流ができるように模索したいとの声があがっている。

4. 考察

・松田(2020)は「カリキュラム・マネジメントとは方法ではなく概念であり、一人一人の実践者がカリキュラム・マネジメントの担い手となるという、カリキュラム概念の原点に立ち返ることが求められている…、一人一人の教師が日々の実践に取り組みながら意識し転換していくことがいかに困難であるかは言うまでもない¹⁵⁾と述べている。「目に見える活動内容ベースのカリキュラムから目に見えない資質・能力ベースのカリキュラム・マネジメントへのリデザイン…(を進めるには)実践者が自分自身と向き合い、自分自身をメタ的に振り返り理解していく営みが重要¹⁶⁾となるからである。榎沢(2016)は保育者の専門性の要素として、「保育の計画をたてること」「保育実践」

「実践の省察」をあげている¹⁷⁾。保育の計画を立てることは「子どもの未来の姿を思い描くこと」であり、保育者が子どもの生活を決めるのではなく、子どもが自己成長することを支え促す手立てを考えることである¹⁸⁾。保育実践においては、その日の園生活において何を大切にすればいいのか「生活の核」となることを把握し、状況の変化に柔軟に応じ、子どもが主体として生きることを保障する¹⁹⁾。そして「保育実践の中で生じる出来事が当事者である子どもと保育者自身にとってどのような意味を持ったのかを保育の脈絡で読み取り、子どもの体験を理解すること」²⁰⁾をめざし実践の省察を行う。カリキュラム・マネジメントの実践は、一人一人の保育者が子どもの姿からめざす子どもの姿を思い描き、「育成したい資質・能力」を核に保育計画をたて、子どもや保育者にとってその実践の意味を読み取り、自己を振り返りながら省察することを繰り返し、保育者の専門性の高まりや保育の質の向上をめざすものであるといえる。目の前の子ども達との生活に追われる中、自己を振り返り、これでよかったのか、次はどうするのかりフレクションを重ねることは容易ではない。しかし、この営みを繰り返すことは、新型コロナウイルス感染症への対応においても必要以上に情報に振り回されることなく、状況に応じて保育内容を工夫させることにつながる。新型コロナウイルス感染症拡大予防下の取組において、A幼稚園は以前からのカリキュラム・マネジメントの営みを生かし、子どもや家庭のおかれている状況を推測し、めざす子どもの姿を思い描きながら「育成したい資質・能力」を核に、子どもや家庭への支援や、保育再開後の計画を柔軟に実践することができた。カリキュラム・マネジメントの実践があればこそ、ネット活用などの新たなツールの導入も柔軟に、振り回されることなく活用することができたと考えられる。実践の中で見えてきたものを省察し、2学期以降の保育に生かすこともできるだろう。カリキュラム・マネジメントの実践は、保育者の専門性の高まりや保育の質の向上を促し、新型コロナウイルス感染症拡大予防下のような未曾有の事態においても質の高い保育をめざすことにつながるようになった。

・実践の省察する中で、直接子どもの姿が見えないということは、「子どもスタート」のカリキュラム・マネジメントを進めるにあたって、保育者にとって大きな不安となったことだろうか。保木井(2020)が保育における集まり場面の研究において、保育者と子どもの相互行為の在りようを明らかにし、「子どもたちと保育者が互いの発信を利用し合うことによる情報の往還で、段階的・集団的な行動の産出が、保育者も巻き込んで達成される」²¹⁾と述べている。保育者は、一方的に子どもに教え込んでいるのではなく、子どもとの相互行為によって保育を創りだしているのである。子どもの姿をみとり、応答的にやりとりしながら保育をつくっているからこそ、臨時休園中に直接子ども

と関われない中で保育の工夫をすることへの不安が大きくなったと考えられる。保育者の専門性の中に「子どもと応答する力」が重要であることが明らかになったとも言えよう。『ポスト・コロナショックの学校で教師が考えておきたいこと』の中で、加固(2020)は休校中の子どもとのつながりを模索し、子どもとのやりとりの場を確保する方法を提案している²²⁾。直接子ども達と関わることができなくとも、双方向のやりとりをする方法を工夫することはできる。家庭における子どもの姿を把握し、応答的にやりとりすることは、家庭の支援にもつながる。臨時休園中において双方向性を意識する取り組みが重要であろう。

・ネット活用については、ツールの1つとして新たに取り入れられた。直接体験を重視する幼児教育において、保育の中でどこまで積極的に利用していくかは今後の課題である。しかし、保護者と直接関わる機会が少なくなっている状況で、家庭とつながるツールとしての利用価値はある。費用やガイドライン、技術、子どもへの健康の影響など問題は多いが、成果と課題を見極めながら、今後どのように取り入れていくべきか考えるべきであろう。A幼稚園の実践においても、ネット活用についての省察はこれからである。子どもや保護者の姿や意見なども調査しながら取り組まれていくだろう。子どもに育てたい資質・能力を第一に考えながら、これから子どもたちが生きていく社会の状況もふまえ、柔軟に新しいことに挑戦し、省察を繰り返して、取り入れ方を模索することも、保育者の専門性の向上につながるのではないだろうか。

・新型コロナウイルス感染症への対応をしながらの保育において、一番苦慮しているのは、どのようにして健康を守りながら、友達との関わりの中で育つ力を育てるのかということである。文部科学省の「幼稚園教育要領解説」(平成30年2月)²³⁾にも示されているように、集団生活の中で「幼児は他の幼児と支え合って生活する楽しさを味わいながら、主体性や社会的態度を身に付け」、「様々な人間関係の調整の仕方について体験的な学びを重ねていく」のである。また藤田(2011)が「遊びの中で見られる幼児の身体接触の意味—身体知の視点から—」²⁴⁾の中で述べているように、「5歳児は身体接触を暗黙的に、しかし巧みに道具的・手段的に用いて」コミュニケーションをとっており、友達との関わりを構築するために身体接触をしている。子どもにとって身体接触はコミュニケーションにおける重要なツールの1つなのである。本園の入園式の取組のように、動画を導入しての工夫も可能であったが、教材や動画などの工夫だけで友達と関わる中で育つ力を育むには限界がある。「自分なりのめあてをもつ」など一見個々の取組で育つように感じられる資質・能力も、友達との関係の中で刺激し合うことなしに育成することは難しいのである。また、異学年の友達との交流を通して経験できることも多い。新型コロナウイルス感染予防のための最新情報を

得て、最小限の制限にするよう工夫し、いろいろな友達と関わる機会は保障されるようにしなければならないだろう。諦めずに挑戦したり、考えたり工夫したりすることは、子どもにも育成したい資質・能力であると考え、保育者自身も、制限の中で諦めずに試行錯誤する意欲、態度をもつべきであろう。

5. おわりに

新型コロナウイルス感染症の拡大は、全世界に混乱を引き起こし、人と人との関わりを阻んだ。命や健康を守ることが第一であり、長期に渡る臨時休園、家庭での自粛生活、マスクやフィジカル・ディスタンスを確保しての人との関わりなど、これまでの生活様式が大きく変わり、いまだ収束への見通しがたっていない。感染への不安を抱えながら、制限のある生活を送っている。しかし、この未曾有の状況であったからこそ、カリキュラム・マネジメントの重要性を再確認し、新たな工夫も模索することができた。早い収束を心より祈りつつ、「いつもと違う状況にも対応したり、楽しみを見つけたりする力」を育む機会と捉え、子どもも家庭も保育者も共に困難な状況を乗り越えていけるよう願う。

A幼稚園は、2020年度の研究テーマを「『資質・能力を育成する教育デザイン』—子どもスタートの教育実践知から読み解く保育の専門性—」とし、保育の省察について深めていこうとしている。新型コロナウイルス感染症拡大予防下の実践についても、どのように捉えるのか多角的に検討しながら、保育にフィードバックできるように省察に取り組んでいるところである。1学期の実践が、子どもや家庭にどのような影響を与え、それをどう捉え、保育を再構成していくのかは、今後の課題である。

倫理的配慮

本稿を作成するにあたり、A幼稚園副園長と5歳児担任に口頭で承諾を得、資料等を参考に許可を得た。本稿の公表にあたっては内容の確認を受け、先生方の承諾を得た。

謝辞

本研究にご協力いただきました園長はじめ、副園長、クラス担任の皆様へ感謝を申し上げます。

注

1) 文部科学省の資料によれば令和2年4月22日現在全国で74%の幼稚園が臨時休業を実施、令和2年5月11日現在に

おいても引き続き73%の幼稚園が臨時休園を実施していた。幼児教育の実践の質向上に関する検討会、附属資料「新型コロナウイルス感染症拡大の状況における幼稚園等の具体的な取組」、幼児教育の質の向上について(中間報告)、文部科学省、103-104、2020。

2) A幼稚園の5歳児では、I期4月2週～(6週)、II期5月4週～(9週)、III期8月4週～(8週)、IV期10月4週～(8週)、V期1月2週～(10週)の5期のまとまりで教育課程を編成している。奈良女子大学附属幼稚園幼年教育研究会、教育課程「育ちの履歴」から編成する資質・能力を育成するカリキュラム、奈良女子大学附属幼稚園幼年教育研究会紀要第32集—I、119-120、2020。

文献

- 1) 幼児教育の実践の質向上に関する検討会、幼児教育の質の向上について(中間報告)、文部科学省、6、2020。
- 2) 同上
- 3) 前掲書1)、5。
- 4) 文部科学省、学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル～「学校の新しい生活様式」～(2020.5.22Ver.1)、39、2020。 ※2020年8月6日にVer.3に改訂されている。
- 5) 幼児教育の実践の質向上に関する検討会、新型コロナウイルス感染症への対応のための幼稚園等の取組事例集、附属資料「新型コロナウイルス感染症拡大の状況における幼稚園等の具体的な取組」、幼児教育の質の向上について(中間報告)、文部科学省、106-117、2020。
- 6) 文部科学省、幼稚園教育要領解説、2018。
- 7) 松田登紀、「子どもスタートの教育」におけるカリキュラム・デザイン、教育課程「育ちの履歴」から編成する資質・能力を育成するカリキュラム、奈良女子大学附属幼稚園幼年教育研究会紀要第32集—I、5、2020。
- 8) 奈良女子大学附属幼稚園幼年教育研究会、教育課程「育ちの履歴」から編成する資質・能力を育成するカリキュラム、奈良女子大学附属幼稚園幼年教育研究会紀要第32集—I、2、2020。
- 9) 前掲書7)、4。
- 10) 前掲書7)、5。
- 11) 同上
- 12) 前掲書8)、2。
- 13) 前掲書7)、11。
- 14) 前掲書7)、11-12。
- 15) 松田登紀、実践知から立ち上げる資質・能力ベースのカリキュラム開発プロセス—「育ちの履歴カリキュラム」を事例として—、奈良女子大学教育システム研究開発センター、教育システム研究(15)、1、2020。
- 16) 前掲書、11。

- 17) 榎沢良彦, 保育者の専門性, 保育学講座4 保育者を生
きる—専門性と養成, 日本保育学会, 東京大学出版会, 11-
15, 2016.
- 18) 同上
- 19) 同上
- 20) 同上
- 21) 保木井啓史, 幼稚園の集まり場面における子どもと保
育者の相互行為の研究—アプロプリエーションの観点
から—, 子ども社会研究 (26), 25 - 45, 2020.
- 22) 加国希支男, 休校中の子どもとの「つながり」を模索
する, ポスト・コロナショックの学校で教師が考えてお
きたいこと, 東洋館出版社編, 東洋館出版社, 104 - 109,
2020.
- 23) 前掲書6)
- 24) 藤田清澄, 遊びの中で見られる幼児の身体接触の意味
—身体知の視点から—, 保育学研究49-1, 29 - 39, 2011.